

武蔵野の地と知を学ぶ —「ESD 成蹊フォーラム 2017」開催記録—

小田 宏信*¹, 小森 次郎*², 財城 真寿美*³, 池上 敦子*⁴

Proceedings of the ESD Seikei Forum 2017:
Learning Land Formation of the Musashino Plateau

Hironobu ODA *¹, Jiro KOMORI *², Masumi ZAIKI *³, Atsuko IKEGAMI *⁴

Keywords : ESD, Seikei Gakuen, the Musashino Plateau, fluvial cliff

(Received May 31, 2017)

1. 開催概要

持続可能な開発のための教育 (ESD, Education for Sustainable Development) とは、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等、人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、それらの問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、もって持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。

成蹊学園一貫教育担当常務理事の下におかれた「学校間連携強化タスクフォースチーム」は、2016年3月26日に「ESD成蹊フォーラム 2016 武蔵野の自然と成蹊の学び」と題したイベントを開催した。その試行を経て、2016年4月には学校間連携によってESD活動を推進する目的で、「グローバル・サステナビリティ教育プロジェクト」(現:「環境教育研究センター(仮称)準備委員会」)が立ち上げられた。本稿は、同プロジェクトチームの主催によって2017年4月に開催されたESD成蹊フォーラム 2017の記録である。

今回のフォーラムの開催日程は、第1部(報告)、第2部(講演)が4月2日(日)、第3部(ウォーキングツアー)

が4月15日(土)であった。4月2日は、成蹊学園各校の同窓会組織である成蹊会主催による成蹊桜祭の開催日であり、例年、多数の卒業生や市民が来校する。桜祭の開催日に本フォーラムの開催を重ねた結果、第1部、第2部は100名を越す来場者を数えた。また、第3部は定員を設けた事前申し込み制とし、27名(開催関係者を含む)の参加をみた。

参加者の顔ぶれは、各校の在校生・在学生とその父母、卒業生、市民(市外を含む)、本学(学園)教職員、学会関係者と多様であり、本学園の関係者にとっての自己認識の機会であるとともに多様なバックグラウンドの方々が交流できる場にしたという、当初のねらいが達成されたとも言える。

表1に、4月2日のプログラムとタイムテーブルを示す。冒頭で小田より趣旨説明を行った後、第1部は昨年と同様、「持続可能な社会づくりのための成蹊学園の学び」とし、各校のESD的取り組みを紹介し合う場とした。後半の第2部は、「武蔵野の「地」の成り立ちを知る」として、地質学者でもあり地理学者でもある小森次郎氏に講演いただいた。私たちの生活の舞台である武蔵野台地の成り立ちについて知ろうというのが趣旨であった。また、第3部のウォーキングツアーは、講演内容を踏まえて、やはり小森次郎氏を案内役に武蔵野台地の武蔵野面と立川面の境界をなす国分寺崖線を西国分寺駅付近から国分寺駅付近までを歩いて、景観の中に地形形成の歴史とその舞台の上での人間による土地利用の営みを学んだ。

以下では、前半で第1部の各報告の概略を紹介し、後半には、講師・案内役をお引き受け下さった小森次郎氏

*¹: 成蹊大学経済学部教授

*²: 帝京平成大学現代ライフ学部講師

*³: 成蹊大学経済学部准教授

*⁴: 理工学部情報科学科教授 (atsuko@st.seikei.ac.jp)

の寄稿により、第2部（講演）、第3部（ウォーキングツアー）の要旨とねらいを収めた。

2. 第1部の報告概要

「第1部 持続可能な社会づくりのための成蹊学園の学び」では、最初に成蹊小学校教務部主任の林田真治教諭から小学校4年生の「夏の学校」における取り組みについて紹介があった。

「夏の学校」は、成蹊小学校および成蹊中学校を特色づける行事であり、①自分自身の生活をきりひらいていく姿勢、②教師と子どもの生の人間としての付き合い、③教室での子どもと違う新しい面の発見、④子どもと子ども、子どもと自然の深い触れ合い、⑤集中的な指導の可能性と心身の鍛錬、⑥総合的な生きた学習を行えること、の6点をねらいに開催されている伝統のある取り組みである²⁾。

小学校の「夏の学校」は、1～3年生を学園寮のある箱根で、4年生を房総白浜（南房総市）、5年生を志賀高原、6年生を岩井海岸（南房総市）で実施している。4年生、6年生ともに南房総であるが、6年生が水泳訓練を主体とするのに対し、4年生の夏の学校は4泊5日の

日程で海辺の自然観察をじっくりと時間をかけて行うところに特色がある。その柱は、磯の生物の採集と観察、海浜植物の体験、地引き網漁体験、塩づくり体験、地層見学、潮干狩りなどである。これらは、林田氏いわく、日常生活で自然環境に接する機会が少ない子供たちが、潮の満ち引きと波のエネルギー、砂浜の変化のなかに身をおきながら、子供たちのしなやかな感性を自然のなかに解放する営みであるという。

2番目は、「中学2年生夏の学校・蹊祭学年展委員」であった中学3年生4名が登壇し、ハンセン病学習の報告を行った。同報告によれば、志賀高原での「夏の学校」の日程中、ハンセン病療養所「栗生楽泉園」の見学に備えて中学1年の3月から開始された事前学習と、見学後、10月初旬の蹊祭（中高の文化祭の名称）での展示に至る約8ヶ月におよぶ学習活動が行われた。準備段階では、課題図書に対する感想文の提出、多磨全生園の見学、ハンセン病に対する差別や偏見と闘ってきた平沢保治さんの講演、生徒たちの学習成果発表があり、文化祭では模造紙による展示に加えて、発砲樹脂ボードで重監房の再現をするなど、大掛かりな系統的な学習には目をみはるものであった。また、「重監房に収容された14歳の少年が、家族恋しさに脱走した」との説明には、発表者たち

表1 ESD成蹊フォーラム第1部・第2部の進行表

司会進行：財城真寿美（経済学部准教授）			
開始時刻	テーマ	所属	氏名
13:00	趣旨説明	経済学部教授	小田 宏信
【第1部】持続可能な社会づくりのための成蹊学園の学び（13:05～14:00）			
13:05	4年生夏の学校における理科教育	小学校教諭・教務部主任	林田 真治
13:15	中学2年生ハンセン病学習	2016年蹊祭 中学2年学年展委員	
13:25	高校生徒会の活動	高校生徒会	
13:35	文学部現代社会学科「コミュニティ演習」成果報告：街についての記憶を記録へ	文学部教授	見城 武秀
13:45	ケヤキ並木を次の100年へ～成蹊学園ケヤキ並木の持続的な未来を考える～	研究助成課	長橋 典子
● 休憩 ●			
【第2部（講演）】武蔵野の「地」の成り立ちを知る（14:00～15:00）			
14:00	武蔵野の「地」の成り立ちを知る	帝京平成大学現代ライフ学部	小森 次郎
14:50	質疑応答		
第3部（ウォーキングツアー）募集の案内			
15:00	閉会の辞	学園常務理事/理工学部教授	池上 敦子

がその少年と同じ年頃であるだけに、心を打たれた。

3番目の登壇者は、高校生生徒会委員の北山さんであった。昨年度と同様に「社会、地域と向き合って」と題されたプレゼンテーションでは、「朝の吉祥寺清掃活動」の企画と実践、井の頭恩賜公園での「スポーツGOMI拾い」への参加、宮古市における東北復興支援活動認定、NPO法人FTCJ（フリー・ザ・チルドレン・ジャパン）のミンダナオ島の子供たちに支援物資を送る活動への参画、ユニセフ街頭募金などの各取り組みが紹介された。「私たちの取り組みを大勢の人たちの前で発表できるのはとても嬉しいです」との言葉が、さわやかであった。

小中高からの発表に続いて、第4報告は文学部現代社会学科の「コミュニティ演習」の成果紹介であり、報告者は文学部の見城武秀教授であった。「コミュニティ演習」は、成蹊大学の位置する武蔵野市や近隣自治体に関わる研究テーマを設定し、インタビューや質問紙調査などの手法を用いながら研究を進め、その成果や提言を地域に向け発信していく授業で、2016年度の授業テーマは、「街についての記憶を記録へ」であった。

見城氏の指摘によれば、出発点になったのは、吉祥寺今昔写真館委員会の皆様との出会いであったという。同委員会は吉祥寺付近を撮影した写真の収集やデジタル化、写真展の開催などの活動を展開している団体であるが、収集した写真の中には、撮影時期や場所が特定されていないものもあり、そこに着眼したのが同年度の演習であった。作業の第1は、写真の撮影場所や時期をつきとめ、「個人的記録」を「社会的な記録」へと編み直す作業で、第2は、昔の吉祥寺を知る方々に写真から思い起こされるかつての街の様子について語り合ってもらい、その内容を記録する作業だったという。本報告では、写真の同定プロセスと、その結果として吉祥寺駅周辺再開発の歩みが浮かび上がってきたことが紹介され、アーカイブ化の作業は、街の魅力を再発見するプロセスであるとともに、住民間のコミュニケーションを生み出すツールであるということが指摘された。同科目は武蔵野市との包括的連携協定のもとに開講されているPBL型の授業であるが、有益な成果が生み出されている。

第1部の最後の報告となったのは、成蹊学園グローバル・サステナビリティ教育プロジェクトの構成員でもある長橋典子主査からの「ケヤキ並木を次の100年へ」と題する報告であった。延長600mにわたり約150本のケヤキが植栽されているケヤキ並木は、四季折々の表情をみせ、言うまでもなく、成蹊学園のシンボルである。これらのケヤキは、1924年（大正13）に本学園が池袋から吉祥寺に移転した際に教職員と生徒によって植樹されたもので、

この樹種が選ばれたのは、武蔵野台地に多く群生していた樹木であったことに加え、成長が早く、生徒たちにすくすくと育ってほしいという学園の教育方針にあったからである。しかしながら、すでに樹齢は100年を超えていることから樹高が25mに達し、落葉期における1日2トンを上回る大量の落ち葉、枝の落下による生命の危険性といった問題に加え、高所作業車による剪定も限界にきている。そのため、樹高25mのものを18m前後まで切り詰める計画剪定が計画されており、実際、2017年3月からは試験剪定とその影響のモニタリングが着手されている。

長橋氏は上記のような報告の上で、市民と行政と成蹊学園の3者の協働によってケヤキ並木の持続的将来を考えるとともに、さまざまな落ち葉活用を实践する「けやきプロジェクト（仮称）」を取り組んでいくべきことを提案し、また、こうした取り組みが成蹊学園の新しい社会的価値の創出につながることを提起した。長橋報告は、成蹊学園のESD活動は教職協働によってこそ真価が発揮できるということを改めて印象づけるものとなった。

ESD (Education for Sustainable Development) 成蹊フォーラム 2017

武蔵野の自然と成蹊の学び

4/2 Sun 13:00-15:00 大学6号館6-301教室

第1部(報告) 13:00~14:00
成蹊学園での環境教育やESD活動の報告

- 成蹊学園のESDの取り組み
- 成蹊小学校での活動
- 成蹊中学・高等学校での活動
- 成蹊大学での活動
- 学園ケヤキ並木の持続的維持管理

第2部(講演) 14:00~15:00
武蔵野の「地」の成り立ちを知る
 講師:小森次郎氏(帝京平成大学)

第3部(ウォーキングツアー)
2017年4月15日(土) 10:00~13:00
国分寺崖線をめぐり 武蔵野台地の成り立ちを知る

JR西園分寺駅10:00集合 → JR武蔵小金井駅13:00解散予定(雨天決行)
 要事前申込(先着20名)
 申込先: strategy@jim.seikei.ac.jp ※氏名、年齢、ご住所、電話番号を明記ください。

※背景画像は、成蹊学園西村健二先生作成「大武蔵野立体地図」(昭和12年刊行)

成蹊学園 グローバルサステナビリティ教育プロジェクト
 第1部・第2部は、事前申込不要・入退場自由
 お問い合わせ:企画室経営企画グループ TEL.0422(37)3761

図1 ESD成蹊フォーラム2017のポスター

背景画像には、大正14年から昭和20年まで成蹊学園に勤務した西村健二氏作成の「大武蔵野立体地図」(『科学知識』17巻4号、1937年付録)を用いた。

3. 武蔵野の地を考える

——講演とウォーキングツアーのまとめ——

小森次郎

3.1 武蔵野の範囲

武蔵野の語を冠したものには、昭和天皇御陵、銀行、鉄道、うどん屋、遊園地などが挙げられるが、我々が思い浮かべる武蔵野という括りは様々である。いっぽう、国木田独歩は随筆「武蔵野」において、当時の自然景観を美しくかつ正確に描写しつつ、その範囲を定義している。それを要約すると、北は板橋から川越、西は八王子より東側、南は布田、登戸、二子、東は亀戸から千住としている。この範囲は東京湾岸から荒川と入間川を上り、霞川を西へたどり、青梅から多摩川に沿って下った線で囲むことができる。これは地形学的に考えると多摩川が作った扇状地にほぼ一致する。国木田が扇状地という地形を意識してその範囲を区切ったかどうかはわからないが、学問的な根拠もあるので、ここでは明治の文豪による括りで武蔵野を注目してみたい。

なお、本講演のタイトルの「武蔵野の地の成り立ち」となると、本来であればその土台の成因、すなわち地表直下の黒ボク土と関東ローム層、下位にある段丘礫層(過去の多摩川の河床礫)やその下の地層、さらにそれを溜めた堆積盆の形成(関東造盆地運動³⁾)についても言及が必要である。しかし、そうなると地球のプレート運動などを含めた壮大なテーマになる。そこで以下では成蹊学園や4月15日のウォーキングツアーで見られるものに絞り込んで話を進めてみたい。

3.2 武蔵野の本来の景観

成蹊学園を含めた武蔵野の過去の景観はどんなものであったのだろうか。造園学関連の文献⁴⁾によれば、武蔵野に対するイメージは江戸期までは「草深い原野」や「牧」「茫漠の野」、明治期には雑木林、という変遷があり、このうち原野や茫漠の野というイメージは、万葉集などの文学的表現の産物であったと述べている。飲みつくせない程の酒が収まる大きな盃を“野見つくせない”という詞をかけて「武蔵野」と言ったらしいが、これはそのイメージを代表するものであろう。さらに、寛正5年(1464年)、後土御門天皇の武蔵野に関する問いに、謁見に上がった太田道灌が和歌で即答し、さらにそれを天皇が「武蔵野は高萱のみと思ひしにかかる言葉の花や咲くらむ」と嘆称した、という逸話があるが、これは武蔵野で代表される江戸も、そこに住む人もまとめて未開の原野と見なされていたという好例かもしれない。

その様な「イメージ」ではなく実際の植生や景観の変遷については、武蔵野台地上や周辺の低地に残された堆積物の花粉分析が明らかにしてくれる⁵⁾。それによれば、針葉樹が優勢であった最終氷期の後、12000年前頃から近世までは、クヌギやコナラ、クリを主として、トチノキ等を含む落葉広葉樹の雑木林が台地上に存在していたとのことである。特に、縄文後期にはクリが増え、弥生時代以降はアカガシなどの照葉樹やスギが徐々に認められるようになるが、これらは食料、建材、燃料を目的とした人による伐採/植林の結果である。時代が下がり、玉川上水の恩恵で台地上の人口が増えると、雑木林は屋敷林としての役割も担う。絵の背景に雑木林が描かれた「国分寺村 炭がま」(江戸名所図会三巻、1834~1836年、長谷川雪旦作)はまさにそれを示している。また、1880年の迅速測図の吉祥寺周辺に書かれた土地利用の情報を見ると、石神井川、妙正寺川、善福寺川、および神田川に沿った低地には水田、台地上には畑と櫛が多く、そのほか桑、茶、雑(「雑」の旧字体で雑木林の意味)、栗といった文字が見られる。櫛林(コナラやクヌギの林)や雑木林は現在の都心部を含めた武蔵野の重要な景観の構成要素であったことがわかる。なお、随筆「武蔵野」で国木田は林の木々が揺れる音に詩趣を感じたとのことだが、自宅があった渋谷区宇田川町周辺において迅速測図中に林(「雑」、「櫛」)が占める割合は、吉祥寺周辺のそれよりも多い。渋谷川等の谷が入り組むことで大きな畑が作られにくく、都市化も進んでいなかったためであろう。

現在、武蔵野で原生林を見ることはできない。いっぽう、本来の景観というものを雑木林という二次林で代表するならば、武蔵野台地に点在する林に行けば見ることができるが、その代表は新座市の平林寺であろう。これは武蔵野の中でも特に大きな緑地(森林)であり、後述するように人工衛星で武蔵野を見おろした時の重要なランドマークでもある。

3.3 宇宙から成蹊学園を見いだす

次に、今回の主題である武蔵野の地の中から成蹊学園を見つけてみたい。ここでは今や携帯電話からでも閲覧することができる衛星画像(例えばGoogle MapやGoogle Earth)を使う。灰色に写る首都圏を次の①から④のステップで拡大しながら、その中の点状の緑地を見つければ容易である(以下の説明はGoogle Mapで、衛星写真が見られる設定(画面隅の「メニュー」の「航空写真」)ですすめる)。

① PCの画面に本州中央部が収まる状態(縮尺約1/500万)にする。この時点で大きさ東西約5kmの狭山丘陵が

灰色の関東平野と緑色の関東山地の境界近くに緑の点として認められる。

② PCの画面に関東平野が収まる状態(縮尺約1/100万)では、都心部に東西約1kmの皇居と明治神宮外苑が見えてくる。この他に見いだせる緑地は前述の平林寺(狭山丘陵の右側)である。

③ 画面の左上に狭山丘陵、右下に明治神宮外苑を配した状態(縮尺約1/10万)にすると、中央やや右下に緑地として幅約500mの井の頭公園を見つけることができる。

④ 井の頭公園を目印に拡大すると、その左上に東京都の境浄水場が長方形の構造物として視認できる。更に拡大すると井の頭公園の上(北側)に成蹊学園が見える。

このように広い武蔵野の地において緑地は様々な大きさで残されているが、中でも井の頭公園と狭山丘陵はそれぞれ過去と現在の水源林である。また、上記手順の③のスケールであれば、武蔵野公園、野川公園、国立天文台、神代公園、深大寺といった緑地が連なるように存在するのがわかるが、これらは後述する国分寺崖線に沿った緑地である。

3.4 成蹊に降った雨はどこに行く?

成蹊学園の周辺には北から石神井川、善福寺川、神田川、仙川が流れている。成蹊に降った雨は、このうちのどの河川に流れるであろうか。

大学の周辺地域は東京都下水道局の石神井川排水区に属している。したがって、ここに降った雨水は下水として東京都の流域下水道の黒目幹線を下り、清瀬水再生センター(成蹊学園から北へ約10km)から荒川支流の柳瀬川へ流れ出ている。したがって、実際の答えは上記のいずれの川でもなく柳瀬川とするのが正しい。いっぽう、下水が完備される前の自然の状態ではどうであろうか。答えは、明治期の2万分の1地形図「田無」で吉祥寺周辺の標高50.0m、52.5m、55.0mおよび57.5mの等高線を色鉛筆でトレースすると次のように見えてくる。

① 降雨が表流水になり、かつ下水道等の配管や住宅が無かったと仮定して、まずその雨水は武蔵野市立北町保育園周辺の東西約100m、南北約300mの凹地へ流れる。

② 雨水が凹地にとどまらないとした場合は、さらにそれは南東方向へ1.5kmほど流れ、吉祥女子中学校付近で底の広い谷状の地形に至る。現在は暗渠となっている河川地形(通称「松庵川」)である。

③ 南東へ下るこの地形は環八通り-五日市街道の交差点の東側で北へ向きを変えて善福寺川へ流入する。

したがって、この場合の答えは「善福寺川」であろう。インターネット上には松庵川の河川地形は人工の地形で

あるとする記事がみられるが、南東に続くこの微地形を詳しく見ると、細かく蛇行をした天然の地形であることがわかる。

3.5 国分寺崖線を歩く

「本質は境界部にあり」とも言うが、武蔵野段丘面の縁辺部である国分寺崖線を見ることは、武蔵野の「地」の本質を知る上で重要かもしれない。崖線(がいせん)とは、崖の地形が連続する場所のことであるが、その地形ゆえに宅地化が進みにくく、さらにその残された緑地を維持する努力により、現在でも自然の景観(生態系や本来の地形・地質の露出)が見られる貴重な場所となっている。このことから、地学、地理分野においてもこれまでに多くのスタディーツアー(巡検)がこの地で行われてきた⁹⁾。今回はそれらも参考にしたが、さらに武蔵野段丘内に刻まれた小河川の地形も見るべく中央線の北側も含み、全体で約5.5kmのツアーを行った。各地点での説明は表2にまとめた通りであるが、さらにここでは主役となった国分寺の立地についての考察、およびESD教育の各テーマとして見た場合の武蔵野や国分寺崖線について簡単に述べる。

3.6 国分寺はなぜそこにあるのか

武蔵国分寺建立の地の選定には四神相応の思想があったという説はテレビ番組でも紹介されている。すなわち、玄武の「丘陵」、朱雀の「湖沼や平原」、青竜の「流水」、白虎の「大通り」が、それぞれ武蔵国分寺の背後(北)の国分寺崖線、前面(南)の低位段丘面(立川面)、左(東)の野川、右(西)の東山道武蔵道に相当するという考えである。しかし、武蔵国分寺の立地の本質を考えるのであれば、そもそも東山道武蔵道がここを通った理由を考えないといけない。この道は上野・下野方面から武蔵国の国衙(現在の府中駅の南側)を結んでいるので、国衙の立地の検討が重要であるが、これは府中崖線(立川面と多摩川の氾濫原の境界を成す段丘崖)のすぐ上の、特にその崖線が岬状に突き出した場所に位置している(図2★)。したがって周囲の見通しが利く岬状の地形が、国衙の立地、さらには東山道武蔵道と武蔵国分寺の立地の根拠に間接的に影響していたと考えられないだろうか。さらに、同様の岬状の地形が国分寺の西側すぐの国分寺崖線の上にも見られるが、そこには南関東で有数の規模を誇る武蔵台遺跡(図2☆)がある。武蔵国分寺の立地には四神相応の思想があるかもしれないが、それ以前にこの二つの岬状の地形も関係しているのかもしれない。

表2 ウォーキングツアーの主な見学地点

見学地点	詳細
西国分寺駅北口	ツアーのスタート地点。南口より静かな北口だが開発計画あり。武蔵野線の線路をくぐって川崎街道(≒鎌倉街道、昔の東山道武蔵道。川崎に入ると府中街道と名前が変わる)へむかうが、その地形は人工の凹地地形。更にその先は恋ヶ窪の谷底に下る急坂。
恋ヶ窪の谷地形	武蔵野段丘面に刻まれた谷地形で野川の源流のひとつ。畠山重忠(シゲタカ)と夙妻太夫(アサギマコ)の恋物語が語源。少なくとも1947年までの地形図では「恋」には旧字の「戀」が使われており今以上に趣がある。その先の小さな水路は玉川上水から分派した恋ヶ窪用水(1657年完成、当時の名称は戀ヶ窪村分水)。途中で見る東福寺と鈴木邸は古い地形図にも記載されている。恋ヶ窪の広い谷底には田圃が広がる(時代によっては地図記号で乾田、水田、沼田を区分して書くことがあるが、この版の地図は田と水田の区別は無く田圃は全て" "の下に横線がつく)。恋ヶ窪から見て、一つ上の段の地形面である武蔵野面には当時は桑畑と針葉樹が広がり、その間となる崖には広葉樹が多いように見える。
谷地形の左岸	前述の鈴木邸の北側を歩く。アパートの東側の小崖にこげ茶色の地層として関東ローム層が見られる。主に箱根や富士山の火山灰(テフラという)と黄砂の堆積、およびそれらの再移動、再堆積の結果形成されたもの。上部の黒っぽい層は腐植物(有機炭素)の多い黒ボク土層。寒冷乾燥な気候であった氷期の主に森林からなる武蔵野台地で茶色のローム層が形成され、過去約1万年よりあと(完新世)には湿潤な気候と人為による草原化により、黒色で酸性の腐植物質(活性アルミと結合した腐植複合体)が地層中に多くなる(細野・佐瀬, 2015など)。この坂を上ると再び武蔵野面に至り、住宅地の中に市民農園が見られる。
姿見の池と雑木林	再び恋ヶ窪の谷底に下る。姿見の池と雑木林(国分寺姿見の池緑地保全地域)に至る。1881年の迅速測図から1947年の1/25000地形図まで池は書かれていないので当初は湿地の中の水溜まり程度だったと考えられる。池を過ぎると小さな雑木林(二次林)からなる。国分寺が「江戸の炭がま」の役割を果たしていた時代は、このような雑木林がいたるところに見られたはずである。
東山道武蔵道	旧鎌倉街道(=東山道武蔵道)。奈良・平安時代の官道の支道(幅約12m)。上野・下野方面と武蔵国分寺、武蔵国国衙を結んだ。これにより雑木林の土台が切り込まれローム層が露出している。さらに南側はJRの線路によってパッサリと途絶えている。
武蔵台遺跡公園	あずまやの下にある遺構はここから西200mの都営アパート建設時に出現した縄文時代の遺跡を移築したもの。これを含め、周囲には遺跡が多数存在する。都立多摩総合医療センター(旧都立府中病院)の建設とその後(1979-2007)に発掘調査された。都内では最古級(X層石器群で暦年較正年代3.6万~3.8万年前)の石器以降、重層して遺物が出土し、その数は計23000点と膨大。石器の岩種は多摩川河原産のチャートとホルンフェルスその他、伊豆・箱根産の黒曜石も含む。武蔵野段丘面の南縁に巨大な集落が早い時期から形成された理由としては、黒鐘谷戸として国分寺崖線が北へ食い込んだ部分で、足もとの谷戸で水の入手が容易であり、洪水の影響がなく、尚かつ崖線が岬状に南へ張り出すという、他と比べると特殊な地形であったことが考えられないだろうか。
国分寺崖線を下る鎌倉街道	中央線の線路の北側で途切れた鎌倉街道の延長とここで再び出会う。足もとの赤土、関東ローム層(武蔵野面を構成する武蔵野ロームと立川ローム)を切り通して道路が下っている。この斜面が国分寺崖線。道路のすぐ西側には黒鐘谷戸(現在は黒鐘公園)がある。この道の西側に伝祥応寺跡(現在は本多4丁目(本多新田)に移築)、東側に塚跡が残る。塚跡から下る斜面にローム層が露出するが、その一番下にはローム層の下にある武蔵野礫層が侵食により露出した転石が見られる。
黒鐘谷戸と国分尼寺跡	国分寺崖線の上の段丘面(武蔵野面)が削り込まれた奥行150m程の谷の地形。「黒鐘」は、府中市の善明寺(大國魂神社の北西約200m)の鉄造阿弥陀如来像(1253年作)がこの地で作られたことに関係あるとの説あり(鉄(クログナ)、黒鐘)。公園内にある池は人口の池でももとは湿地であろう。1881年の迅速測図と1906年以降の一連の地形図で田圃と書かれたことはない。国分尼寺の位置は明治から戦後まで論争。この黒鐘谷戸の出口付近の他に、武蔵国国衙近くの京所(府中競馬場の北)とする説があった。現在は一部を掘りこんで尼寺の壁(基壇)が版築で築かれたことを説明している。
国分寺市文化財資料展示室	資料館に隣接する国分寺市立第四中学校から出土した遺物を中心に展示。職員の方に説明をお願いできる。国分尼寺関連や東山道武蔵道の復元の展示のほか、住田正一氏の武蔵国の郡名瓦・郷名瓦のコレクションが興味深い。板碑の岩種は板状に整形しやすい変成岩を使用。武蔵国に多く秩父の緑石片岩でできているものを武蔵型板碑という。卒塔婆の一種。
国分寺跡	現在は発掘された基礎が主に残る。国分寺の建立にこの地が選ばれたのは四神相応の思想からとNHKの「プラタモリ」でも紹介されているが、旧石器時代から黒鐘谷戸近辺(武蔵野面の軸先)に人が多く住んでいたことを考えると、再考すべきではないだろうか(詳細は本文参照)。1947年の地形図を見ると現在の元町の旧名は八幡前で国分寺の北側にある八幡神社からきていることがわかる。
お鷹の道	川底には武蔵野面を構成する武蔵野段丘礫層から洗い出された砂利が見られる。過去の多摩川の河原の石が一度地層として埋没したあとに数万年ぶりに陽の目を浴びていることになる。道沿いには本多園(農家、植木屋)など、本多氏一族の家が点在。
真姿の池湧水	進行方向の左手に続いていた崖線がここで一旦途切れる。この先は崖線を切り込む谷として、野川の主流が北から南へと流れる。この谷地形は押切間と言われている。語源はこれより上流側をせき止めて用水路を作ろうとした時の堤が押し流されたためとのこと。上流側(左側)で野川を渡る橋は国分寺駅から南西へ延びる道路「多喜窪通り」。多喜は滝からきたのであり、野川でのほとぼしる水の流れを想像させる。野川の上流には日立製作所中央研究所(昭和17年~)内に昭和33年に完成した大池(もとは湿地。水源は崖線沿いの湧水)がある。創業時の社長、小平浪平の指示で目立った立木は保護された。小平はもともとは久原(から)鉱業所日立鉱山の技術者。鉱毒問題による自然保護の意識があったのではないかと。
押切間	緑橋。国分寺駅側(北側、武蔵野面側)と元町側(南側、立川面側)の境界。橋のたもとに洪水を防ぐスライド式の防水壁がある。現在は機能していないことが、土の詰まったレールが物語っている。さらに進むと一里塚橋。野川本流と元町用水の合流。野川が道路をくぐるが、かたちの異なる短いトンネルが二本ある。なぜなのかわからない。過去には下流で流路が二本に分かれていた可能性あり。
合流点	野川にかかる橋「もみじ橋」。下流側を見ると両岸で高さが異なるのがわかる。何を意味しているだろうか。右岸側にはマンション(ボンデラブル国分寺)。もともと敷地内にあった瓦屋根の棟門を近年のリノベーション後もうまく活用している。
長谷戸	長谷戸(はせど)は国分寺第二中、第七小を含む低地から早稲田実業中高の西側を南流し、南町二丁目交差点の北側から南東に流下し野川に合流している。この地形の南東側の高台は上空からみると三角の台地に見えるが、過去の地形図から1947年~1967年の間に宅地化されたことがわかる。殿ヶ谷戸の谷とは別物であることが1921年とそれ以前の地形図や1881年の迅速測図からわかる。すなわち「三角台地」の北側の頂点はもともとは、国分寺駅北側の武蔵野面とつながっていた。既存の地形分類図は武蔵野面本体から分離していたように表現されているがそれは違う。
国分寺駅南口	本ツアーでは時間の関係上もみじ橋から直接駅へ移動して解散した。駅南側の都立殿ヶ谷戸庭園は1913年に南満洲鉄道副総裁の江口定条(サゲエ)の別邸として造られたもの。1929年に岩崎彦弥が買い取った。

武蔵国分寺の建立に関して「なぜそこに」の理由が考えられた次には、「なぜその時代に」国分寺建立に至ったのか、すなわち鎮護国家思想がおきたのかを考察したいが、これについては他の機会に譲る。

3.7 武蔵野のESD

一般にESDの基本的な考え方として挙げられる「気候変動」「生物多様性」「防災教育」「エネルギー教育」「環境教育」「国際理解教育」「世界遺産や地域の文化財等に関する教育」、および「その他の関連する教育」に対して、上述の武蔵野の範囲の定義からウォーキングツアーの内容(表2)までがどのような関係になるか、最後に整理してみたい。

武蔵野の地の定義のうち、特に武蔵野段丘やその表層の黒ボク土の形成⁷⁾については、氷河性海水準変動や完新世の安定した温暖な気候という気候変動に関する話題に触れずに理解することはできない。また、主に火山灰からなる関東ローム層は火山を通じた防災教育の教材として活用できる。武蔵野の植生や景観の変遷といったテーマや、ウォーキングツアーのテーマとなった国分寺崖線という地形とそれに沿って維持されている緑地や湧水地は、環境学習に関する貴重な教材となっている。さらに、文学として残された武蔵野に関する記述や、明治期以前の植生(景観)がイメージできる雑木林、および武蔵国分寺跡や旧東山道武蔵道はまさに地域の文化財であるし、人それぞれでその背景を考えることは、単なる学びでなく、自らが主体的に感じ、考えることができる地域教育の一例といえよう。

この他、今回は講演のスライドで説明しただけとなったが、子供が手動のボーリングで武蔵野台地を掘削した事例は、自らの手で5m近くを掘り抜くという経験(空間の経験)、並びに過去数万年分の武蔵野の歴史(地層)を遡るといふ経験(時間の経験)の場である。これは大きな時間・空間スケールの視点に立った気候変動、環境学習、防災教育に関係する。その時にもし地温計測や地中熱利用といったテーマまで発展することができれば、温暖化の影響といった気候変動や環境学習だけでなくエネルギー学習についても触れることになる。以上のように武蔵野の地はESDの教材やテーマとしても極めて幅広い可能性をもっている。筆者としても今後更に活用を検討していきたい。

参考文献

- 1) 持続可能な開発のための教育に関する関係省庁連絡会議『「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム」実施計画』平成28年3月10日決定。
- 2) 小学校創立100周年記念誌編集委員会編『たしかなあしづみ：成蹊小学校創立100周年記念誌』成蹊小学校、2015年。
- 3) 矢部長克・青木廉二郎「関東構造盆地周縁山地にへる段丘の地質時代」地理学評論, 3, 1-9, 1927年。
- 4) 山根ますみ・篠原修・堀繁「武蔵野のイメージとその変化要因についての考察」造園雑誌, 53, 215-220, 1990年。
- 5) 吉川昌伸「関東平野における過去12,000年間の環境変遷」国立歴史民俗博物館研究報告, 81, 267-287, 1999年。
- 6) 藤平秀一郎「茨城県立境高校・東京都立多摩科学技術高校の合同地形観察巡検の報告」地学教育, 68, 53-54, 2014年。
- 7) 細野衛・佐瀬隆「黒ボク土層の生成史：人為生態系の観点からの試論」第四紀研究, 54, 323-339, 2015年。